

神の戒め

狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。 マタイ福音書 7:13,14

イエス様ってすごいなあ…と感嘆する。こんな言葉が語れるのは、ご自身が命そのものであられるイエス様をおいて他にない。

門、道、命、これら三つとも「わたしは門である」「わたしは道である」「わたしは命である」とイエス様ご自身が(ヨハネ福音書で)言われているが、ここではそれをあえて「狭い門」「細い道」と言われたのは、自然のままの人間は命への道避けようとするからだろう。「それを見いだす者は少ない」とあるから、人には命への道は隠されていて探さないと見いだせないと言うことかも知れない。どちらにしても、人がイエス様を避けようとし、イエス様が隠されているというのは、本当だ。

人間は自分勝手に生きたいのだ。神の戒めに聞き従うなんてまっぴらなのだ。私だってそうだった。でも、自分勝手に生きて心は虚しく、自由でも何でもなかった。虚しさが極まった時、狭い門から入ろうと決心し、細い道を歩み始めた。そして分かった。あの虚しさは、神様のいない心の状態であり、それが罪というものなのだ。

そして、神の言葉である聖書を学び初めて、聖書がいかに奥深いものであるか、ますます感動するようになった。今の私に開かれているのはほんの表面で、でもほんの表面でさえこんなに素晴らしいのなら、その奥はどんなだろうとワクワクしながら、飽きもせず毎日聖書を読み続けているというわけである。

先日から数人の人と共に、再び「ローマの信徒への手紙」を学び始めた。今週は、1章24節～32節が私の担当だったので、関根正雄著作集「ローマ人への手紙講解」を何度も読んだ。何度でもくり返し読まずにはおられないほど感動したからだ。と言っても、ロマ書1章24～32節というのは、決して、読んでうれしい箇所ではない。ともかく人間のありとあらゆる罪について書かれているのであって、以前ある人から「途中で息苦しくなって、とても最後まで読めなかった」と聞いたことがある。しかし、聖書で言う「救い」とは「罪からの救い」なのだから、罪について少しでも深く正確に学ぶことは本当に大切なことなのだと改めて知らされた。たとえば、その罪の羅列の中に「親に逆らう」と言う項目があり、その一つに関してでも私はアッと驚くほど教えられた。

「汝の父母を敬え」というのが十戒にあるのは周知のことと思います。ところがこのことがこの頃ではあまり行われなくなりました。親に従わないということは、それ自体としても困ったことですが、家庭の秩序が社会の秩序、あるいは一つの国の秩序の基礎ですから、そういう社会なり国なりははなはだ危ないと云わざるを得ない。しかしここでパウロはそれを社会的な問題としてのみならず、信仰の問題としても考えていると思います。というのは、旧約聖書では父と母は神の代理としてこの地上に置かれているのであり、その父と母を敬うことがなければ神を敬うことがないと考えているからです。これは非常に深い問題でありまして、人格ということに関係します。人格というものが最小限度分かるのは夫婦の間、あるいは親と子の間です。なんといっても日常接しているのですから。だから妻を愛し夫を敬い、あるいは子供を本当に愛し、親を愛し親に従うということが最小限度出来ていないような場合には、根本的に間違っているのです。要するに人格関係が成り立つべき一番身近の場所は家庭なのです。ですから、家庭において形式的にでなしに実質的に人格的な夫婦の関係が成立しているかどうか、また子供と親との人格的な関係が成立しているかどうかということは、

きわめて大事なことです。

関根正雄著作集 18 巻「ローマ人への手紙講解上」p94

ここで言われていることが100パーセント分かったわけではないけれど、ただ「本当にそうだ」と感じる。「家庭において形式的にでなしに実質的に人格的な夫婦の関係が成立しているかどうか、また子供と親との人格的な関係が成立しているかどうか」ということは、きわめて大事なことだと。

キリスト信仰を与えられて、かつては自分のことしか考えなかった私が、少しは他の人を思いやれるようになって、いろいろな重荷を負う人との交わりも与えられて、生活も充実して感謝だなあ…と思っていたのが、「父と母を敬うことがなければ神を敬うことがない」という言葉に、ドキッとした。私も私を産んでくれた母を大切にせねばとは思う。でも、神の戒めとして敬うというのとは違う。普通に考えると、戒めに従って義務として親を敬うより、自分の心からあふれて大事にすることが美しいように思う。しかし、自分の心からあふれてと言うのであれば、好きな親は大切に、自分を苦しめた嫌な親など顔も見たくないということになってしまう。心のままにではなく、戒めとして「父母を敬え」とあるのである。

ここがキリスト信仰のポイントだなあと思う。自分を中心において、自分の心のままに物事を判断し神の戒めに従おうとしないなら、どんな状況になっても自分という迷いや不安から解放されることはない。他なる重荷はいつか降ろせても自分という重荷は死ぬまで降ろせない。いや聖書的に言うなら死んでも降ろせはしない。このどうしようもない自分という重荷(罪)を負って死んでくださったのがキリストの十字架であり、この十字架のイエス様にすがるとき、自分という囚われから解放されて真の自由が与えられる。その時、自分ではどうしても従えなかった神の戒め、イエス様の愛の戒めに、少しなりとも自由に喜んで従えるようになる。それがイエス様が私の救い主であるとい

うことであり、福音の力なのだ。

8月24～25日、京都桂の地で13回目の近畿集會が与えられた。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです」フィリピ2:13との御言葉どおり、この13年間、背後でお導きくださった神様を実感せずにはおられない。何の力もない小さな者たちを守ってくださるというイエス様の恵みを味わい知らされただけでなく、その上に、思いよらない、永遠に続く兄弟姉妹が与えられるなんて！ああ、やっぱり神様は素晴らしい！

何とうれしい秋風。

本当にやってきたんだね、爽やかな秋。

愛と平和に満ちた御国も、必ずやってくるね。

さあ、今日も祈ろう。

「御国が、御国が、御国が来ますように」

福音 No.303 2013年8月

誇る者は主を誇れ

どのようなときも、わたしは主をたたえ

わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。

わたしの魂は主を賛美する。

貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。詩編34:2～3

今週のクローバー集会の聖書箇所は、詩編34編とルカ福音書22章31節から。さあ、予習をしておかなければと、詩編34編を開く。まず、2節をくり返し音読すると「どのようなときも、わたしは主をたたえ・・・絶えることなく讃美を歌う」という詩人の歡喜が波のように寄せてくる。

そして3節、「貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え」という呼びかけに、貧しい人とはどのような人をさすのだろうかとふっと考えた。以前には「苦しんでいる人」というような書き込みがあるが、今回は、そうだ、貧しい人とは自分には何の誇るところもない人、誇りを持ってなくなった人に違いないと思った。この世にあっては、自分に誇るところのない人は惨めである。だから、卒業式では「皆さん、この学校の卒業生であることを誇りとして生きてください」と妙な励ましを与えたりする。もちろん、人はそんな外面的なものを誇って生きていけるほど単純ではないが、それでも人と話していると、その人の誇りとするものがピンピン伝わってくることは多い。ある人にとっては仕事であり、ある人にとっては家族であり、自分の生き方そのものに誇りを持っている人もいる。それらすべての誇りが砕かれて、もう立ち上がれないほど打ちひしがれている人に、「貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え」と呼びかけているのだと感じた。

さて、では、「それを聞いて喜び祝え」のそれとは、詩人の「主への讃美」に違いないが、もう一つしっくり来ないので他の訳を見てみた。すると他の訳はどれもみな、「主を讃美する」が「主を誇る」となっている。なるほど！と感動。誇りをなくして打ちひしがれている人たちに、この詩人は「わたしは主を誇って生きている。さあ、あなたにも主を誇りとして生きる道がある。喜び祝え」と呼びかけているのだ。そして4節。

わたしと共に主をたたえよ。

ひとつになって御名をあがめよう。

と続く。

なあるほど！私たちは、主を誇りとするようになってはじめて、ひとつになれるのだ。それぞれの人が自分の内にそれぞれの誇りを持っている限り、本当の意味でひとつになることなどできない。そうだった、だからパウロも「誇る者は主を誇れ」と言っているのだ。その後も読み進めていくと

主は打ち砕かれた心に近いまし

悔いる霊をすくってくださる。19 節

とあり、この詩はやはり、自分の内にある一切の誇りが打ち砕かれて、主を誇りとして生きるようになった者の幸いを歌った詩だと一人納得した。

次は、ルカ福音書22章31節から。最後の晩餐の後イエス様が「ペテロの離反を予告する」箇所から読み始める。

十字架を目前にして、「あなたのために、信仰が無くならないように祈った」というイエス様の深い愛のお言葉に、ペテロは「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と威勢よく答えた。このペテロの言葉に、あっ、これがペテロの誇りだ！と思った。それがどんなに一生懸命なものであっても、人間の誇りは神の栄光を現しはしない。もし、ペテロがこの思いを貫けたとすれば、その後、逃げていった弟子たちと心をひとつにすることはなかっただろう。

幸いなことに、ペテロはその強い決心(誇り)を貫くことはできず、イエス様を3度も否認してしてしまう。このあたりの描写は、ルカ福音書が格別印象的だ。

捕らえられたイエスについていったペテロは、「おまえもイエスの仲間だろう」と問われて「わたしはあの人を知らない」と3度も言うてしまう。

「まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、『今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。」

このペテロの姿こそ、自分につける一切の誇りを打ち砕かれて、もう、主を誇りとして生きるよりすべのない者とされた姿なのだった。

神の思いと人の思いの何と違うことか。人は誇り高く堂々としているのが好きだ。だから、ローマ兵に囲まれ、ピラトの前で項垂れるイエス様を見ると、そんな情けない者は私たちの王ではない「十字架につける」と叫んでしまう。十字架の上で血を流されるイエス様を見ると「今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう」と嘲笑う。その時イエス様が十字架から降りられたなら、終わりの日に十字架に着かねばならないのは私たち自身であることも知らないで。

ともかく、人はどこまでも誇り高くありたいのだ。さあ、しっかり勉強をして、スポーツに励んで、人の上に立つことができるように。イエス様の弟子たちでさえ最後まで「だれがいちばん偉いか」と議論し合っていたとある。…こんな人間の姿を思っていると心はだんだん暗くなる。本当に、人間の現実ばかり見つめていると生きる力も萎えてくる。

こんな暗くなった心に、明かりを灯すすべを私は知った。

「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と言われるイエス様を信じて生きること。氣力が衰えても、「神を愛し、人を愛せよ」と言われるイエス様の言葉に一歩従うと、不思議なほどの心は軽く明るくなってくる。

それと、もう一つ、思いだすだけで心に清い風が吹いてくる人がいる。生まれてすぐ

お寺の境内に捨てられていたという O さん。ダウン症でずっと施設で暮らし、年をとって、今では自分で立つことも食べることも、もちろん話すこともない。でも、何の誇りも持たないその O さんのつぶらな瞳は、夜空の星よりも清く美しく輝いている。人に嘲られ捨てられたイエス様は、今も生きて私たちと共におられる。